2020・5・10HBC 礼拝説教「都にとどまっていなさい」(ルカ 24：45～53)

招詞：ピリピ 2：6～11

主の祈り

交読：詩篇 121：1～8

聖書朗読：ルカの福音書 24 章 45 節～53 節

「見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」(使徒 24：49)

使徒の働き 1 章を見ますと、主イエスはご復活の後、天に昇られる前に 40 日にわたって使徒たちに姿を現して神の国のことを語られたとあります。それからさらに 10 日が経って五旬節の日に約束の聖霊が使徒たちに下り、彼らは主イエス・キリストの十字架と復活の福音を宣べ伝えはじめたことがわかります。主が約束されたとおりでした。

私は「都にとどまっていなさい」と言われた主イエスのみことばを、今の現実と重ねて思うようになりました。それは、コロナウィルス感染予防のためにできるだけ外出を控え、通常の働きを自粛するようにという要請と、それぞれの住まいがある都や県の外に出ることを控えるようにということが、緊急事態命令の発令によって指示されているからです。

今、都民である私は都にとどまっています。この状態がいつまで続くのかはわかりません。現時点では「とどまっていなさい」ということです。

もちろん使徒たちに主イエスが命じられたのと、コロナ対策によることとはまったく事情が異なりますけれども、「とどまっていなさい」ということは同じです。

「とどまっていなさい」というこのとき、私たちは何をすればよいのでしょうか。使徒たちは主イエスが約束された聖霊を待ち望みながら、来るべき福音宣教開始の時を待ち望んでいました。

私たちも今は教会の扉を開いて人々を招くことはできません。教会による福音宣教の機会が極めて小さくされています。でもまったく失われているわけではありません。福音を届ける放送伝道の電波は発信されています。しかし教会に集うことができない、信徒がともに集まることもできないという状況は、使徒たちのときよりも悪いです。使徒をはじめとする人たち 120 人は同じ所に集まって祈ることができたからです。私たちには今、それができません。

希望聖書教会の多くは戦後生まれです。向井さんは別ですけれども。戦後は現在の憲法のもとにさまざまな自由の恩恵を受けて生きています。しかし、戦時中は明治憲法と戦時下の指令によって多くの自由が奪われていました。キリスト教信仰もそうでした。それよりももっと前にさかのぼればキリシタン禁教令によって信仰者が弾圧されていました。

豊臣秀吉の時代に出された厳しい禁教令によって危険にさらされたキリシタンにとって、殉教は避けることのできない現実でした。そのために当時の教会は殉教教育というものを行っていたことがわかります。その教えの基本となったのは初代教会の聖徒たちの姿でした。ステパノをはじめとした聖書の人物、ローマ帝国時代に殺されたキリスト信者たちのこと。そしてパライゾすなわち天国の喜びとインヘルノ地獄の未来永劫の苦しみについての教えがあり、キリスト信仰のために犠牲となることはキリストのもっとも忠実な弟子とされることであり、神の恵みに与ることでした。その犠牲の価値と功徳は社会全体のためにも有益であり、多くの人の救霊と教会の発展のためにもなる、という確信を持っていたということです。

キリシタンにとって信仰のために殺されるということは避けることができるならば避けたいというのではなくて、その時が来れば受け入れるべき徳とさえ受け留められていたということです。キリスト教会初期の教父であったテルトゥリアヌス(AD166～222)は「殉教者の血は新しいキリスト信者の種子である」と語っていました。

そのように私たちの信仰の先輩たちは主イエス・キリストに対する信仰を捨てることなく、危険を覚えながら

も密かに集まって礼拝を献げ、また祈っていたのです。いつか、はばかることなく真の神への礼拝を献げるときが来ますように。この真実な神への信仰を滅びゆく人々に自由に伝える日が来ますようにと。

そして全能の主なる神、時をも支配される神は、その日その時を用意しておられました。だからこそ私たちに救いの機会が与えられてきたのです。

まったく異なる事情で行動の自由が制限されている今、私たちはこれからに向かって何を備えていればよいのでしょうか。主イエスに命じられていた使徒たちに学ぶことは何でしょうか。言うまでもないでしょう。今は、一人一人が、あるいは家族や少人数で、別々のところで祈り待ち望む時。そして制限が解除されたときには、共に集まって、今までにも増して祈り求めることであることは確かです。そのようなことのために今の危機が用意されていたのではないかとさえ思わされます。そして今は、いのちの危険にさらされている人々のために祈るべきときです。ウィルスと戦っている人々、リーダーたちのために。また生活が脅かされている人々のために祈りましょう。

さて、ルカの福音書 24 章における主イエス・キリストと使徒たちのことに目を向けましょう。主イエスが使徒たちに伝えられたことは、キリストの苦難と復活が聖書、旧約聖書に預言されていたことの成就であったこと。そしてその出来事によって、イエス・キリストの御名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に伝えられるべきこと。そのために使徒たちがキリストの証人となること。それをなしていくためには、いと高き所から力を着せられなければならないこと。すなわち聖霊が注がれなければならないことです。そして、そのために、そのときが来るまで都エルサレムにとどまって待つべきことでした。

この主イエスのことばに、救いのために必要な内容、すなわち福音が語られています。改めて確認するまでもないことです。キリストの十字架と復活、その事実を信じ受け入れて、自分の罪を告白して悔い改めることのよって、救いが得られることです。

しかし罪ある人間がそのように導かれるためには聖霊の助けが必要だということで、使徒たちはその聖霊の注ぎを受けるために、都にとどまって待っていなければならないということでした。

その命令を伝えられてから、主イエスは彼らをベタニアの近くまで連れて行って、祝福されたのちに離れて天に上げられました。ベタニアはエルサレムに近い村で、主イエスと使徒たちにとって親しみのある所でした。そこにはマルタとマリア、そしてラザロの 3 人が住んでいた所です。ガリラヤからエルサレムに一行が来るときには必ず立ち寄って過ごした所でした。

使徒たちはその日をただ待って過ごしていたのではありません。52 節 53 節に「彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、いつも宮にいて神をほめたたえていた。」と記されています。

ここに「イエスを礼拝した後」とあります。すなわち使徒たちにとって復活された主イエスは、それ以前のように彼らの尊い先生ではなくて、礼拝を献げるべき神としてのお方であるという認識があったということです。

キリストは、神である方が人となられて生き、そして死に、復活によって礼拝されるべき神として現れたという事実です。弟子の一人であったトマスは、よみがえられた主イエスに向かって「私の主、私の神よ。」（ヨハネ 20：28）と告白しました。

パウロはこのことについて、ローマ人への手紙 1 章のはじめに「――この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖なる霊によれば死者からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちのイエス・キリストです。この方によって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。御名のために、すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらすためです。」と語っています。

使徒たちは「大きな喜びとともにエルサレムに帰り、いつも宮にいて神をほめたたえていた」のです。しばらく前にはユダヤ人たちを恐れて隠れていた彼らが、ユダヤ人たちから目撃されるであろうエルサレム神殿に出て行ったということは、とても大きな変化ではないでしょうか。何が変わったのでしょうか。何が彼らを変えたのでしょうか。イエスをキリストと信じる彼らを取り巻く環境は以前と変わったとすれば、それはより厳しい状況

に変わって行ったとしか考えられません。それにも関わらず彼らをそのようにならしめたのは、よみがえられた主イエスにお会いすることができたという覆すことのできない事実だったと思います。

3 年半の間いつも離れることなく一緒にいてくださった主イエス。その主イエスが捕えられて引き離されてしまったという悲しみと失望に襲われていた使徒たちです。そこにみからだをもって現れてくださった主イエス。これほど大きな励ましと力は、使徒たちをはじめとする弟子たちにとって他にはなかったでしょう。

よみがえられた主イエスは死さえも滅ぼすことができません。むしろよみがえられたキリストはどんな者も決して抗うことのできない死の力さえも滅ぼされる方です。私たちはそのキリストにつながっています。ですから終わりの日に復活の栄光に与る私たちは再び死ぬことがなく、永遠に生かされるということです。

私たちが死んで、今のからだのいのちを失って死んでも、私たちのたましいはそれまでの間、地上で経験しなければならないすべての苦悩から解放されて、主の平安の中に安息を得させていただくということです。

さて、私たちコロナウィルスの影響を受けてとどめられている状態ですけれども、私たちは今、何をすることができるのでしょうか。「都にとどまっていなさい」と言われているとき、使徒たちは「いつも宮にいて神をほめたたえていた」のですけれども、私たちは教会の礼拝の場にともに集うことはできません。しかし互いにからだは離れてはいても、使徒たちの時代には考えられなかったインターネット配信によって、置かれている所で同じ聖書の朗読を聴き、その説教を聴いています。まさに今、あなたは礼拝しています。信仰の仲間と心を一つにして。これがいつまで続くのかはわかりませんけれども、再び教会堂の門が開かれて共に集まり、また他の人々が教会の扉を入って来られる日が来るでしょう。その日に備えて、私たちがするべきこと。それはあの日主イエスの命令を聞いた人たちがしていたことをすることではないでしょうか。

それはルカの福音書の続編とも言える『使徒の働き』にあります。使徒たちを中心とした人々について、「彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた」(使徒 1：14)とあります。彼らは屋上の部屋という同じ場所に集まって祈っていました。

私たちは今一つの場所、すなわち教会堂に集まることはできていません。けれども彼らと同じように「心を一つにして祈る」ことはできます。アーメン。

主イエスは言われました。「恐れないで、語り続けなさい。黙っていてはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

(使徒 18：9～10)

その前提として主が言われたことばは「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」(使徒 1：8)ということです。

これらの主イエス・キリストのみことばに導かれて、私たちが確認して祈り求めることは明確です。この教会が置かれている町、皆さんがいる町に、イエス・キリストに導かれるべき人たちがたくさんいるということを覚えて、大いなる救いの御業がなされるために祈り、福音を証しするということです。私たちクリスチャンの存在目的はそこにあります。一つの地方教会として取り組むことはいろいろありますけれども、いちばん大切なのは十字架に架かって私たちの罪のために死んでくださり、死の力を打ち破ってよみがえられた主イエス・キリストの福音を証しすることです。そのために祈りましょう。人々の救いのために祈りましょう。そのために主が私たちを用いてくださるように祈りましょう。

祈り

グローリア

祝祷